

# 私の履歴書

前橋 汀子

⑬

その日はワイマン先生からチャイコフスキーのバイオリンコンチェルトのレッスンを受けるはずだった。まだ私が音を出す前に先生が言った。

## オペラ観劇

「デイク、君は『エフゲニー・オネーギン』を見たことがあるかい」。私はバイオリンコンチェルト

のあの難しいパッセ

ーシをどう弾くかだけで頭がいっぱいだったから、チャイコフスキーのオペラなんて考えもしなかった。

オペラ「エフゲニー・オネーギン」はロシアの詩人プーシキンの韻文小説が原作だ。田舎娘タチアナが青年貴族オネーギンに手紙を書く名場面がある。「チャイコフスキー

のバイオリンコンチェルトはあの手紙の場面そのものなんだ。その背景を理解しなければ、あのコンチェルトは弾けないよ」と先生は強調した。ぼかんとしている私を見て

## ロシアの魂体で感じる

曲の背景学び、演奏に厚み

先生は言った。「さあ、見てきなさい」。今の時代なら名作オペラの映像ぐらい容易に手に入るだろうが、1961年の話である。「見てきなさい」と言われても、日本に

たら途方に暮れたはずだ。

ところが、レニングラード音楽院の目の前にはオペラの殿堂キエフ劇場があるのだ。何と恵まれた環境だろう。私は早速「エフゲニー・オネーギン」を見にいった。

「先生のお考えは、曲の背景にある歴史や文化、伝統を学

びなさいということだ。私は劇場でオペラやバレエを鑑賞するだけでなく、少しでも時間があれば近所のエルミタージュ美術館にも足を運ぶようになった。チェーホフやドストエフスキーも読み始めた。レニングラード音楽院では

先生は言った。タマラ・オーシボブナ先生のロシア語の授業も受けていた。おかつ頭の先生をそっくりの女性の肖像画をエルミタージュ美術館で見つけた。レナブラントの絵だった。

先生の生徒は私と潮田益子さん、ベトナムから来た男子学生2人の計4人で、徹底的に詩の暗唱をさせられた。プーシキン、レールモントフ、ネクラソフといったロシア

を代表する詩人の作品だ。やたらと難しい。もっと実用的な語学を教えてくれればいいのにと若い私は思っていた。

「今日、2月10日はプーシキンの命日です。決闘のあった場所に行きましょう」と先生は言った。プーシキンは決闘で受けた傷が原因で亡くな



エルミタージュ美術館で級友と

民的な詩人で、チャイコフスキーの音楽もロシアを象徴する音楽だと思つた。2つの才能の結晶ともいえるオペラ「エフゲニー・オネーギン」はロシアの風土や習慣、物の考え方など、すべてを網羅している。ロシアそのもののものだ。チャイコフスキーのバイオリンコンチェルトは、今も私の重要なレパートリーになっている。昨年も演奏した。この曲に向き合うたび

っている。私たちは腰まで雪にはまりながら、もがくように歩いた。「ここで雪が血に染まったのです」。今も先生

の声が脳裏に響く。

当時の私にはその意味が理解できなかったが、今なら分かる。先生は私たち留学生にロシアの魂を教えたかったのだ。プーシキンはロシアの国

の世には映像や本では学べない何かがある。私はあの極寒のソ連で悪戦苦闘しながら、確かに何かを感じた。私の掛け替えのない財産だ。それがあるから、今はチャイコフスキーを弾くのが本当に楽しい。(バイオリニスト)